

東大寺東塔院跡の調査(平成第600次)

奈良文化財研究所は、東大寺、奈良県立橿原考古学研究所とともに史跡東大寺旧境内発掘調査団を結成し、3年前から境内整備事業の一環として東塔院跡の発掘調査を実施しています。今回の調査は、東塔を取り囲む廻廊と南門、東門の様相解明を目的として実施しました。今年度の調査は2018年7月2日から継続中です。

東塔院は、当代随一の高さを誇った七重塔である東塔とそれを取り囲む廻廊からなります。これらの建物の創建は奈良時代に遡りますが、平安時代末の平重衡による南都焼き討ちで焼失しました。鎌倉時代に入り再建されるものの、南北朝時代に雷火により再び焼失し、それ以来再建されることはありませんでした。これまでの調査では、東塔院全体で鎌倉時代再建期の遺構が確認されており、東塔基壇では奈良時代創建期の遺構もみつかっています。

今年度の調査では、南門と東門での鎌倉時代再建期の遺構と、廻廊での奈良時代創建期と鎌倉時代再建期の2時期の遺構を確認しました。以下、この2つの成果について詳しく述べます。

まず、門の調査では、鎌倉時代再建期の様相があきらかになりました。昨年度からの継続調査となった南門では、東塔基壇との間にある階段と参道の痕跡が今回新たにみつき、階段は南門の中央間に、参道幅は東塔南面の階段に幅を揃えていることがわかりました。また、東門では基壇上に礎石や凝灰岩・花崗岩の敷石が残り、その規模が梁行2間、桁行3間であることも判明しました。

東塔院の四隅に調査区を設けた廻廊の調査では、東塔基壇以外ではじめて奈良時代創建期の遺構を

確認しました。そして、驚くことに鎌倉時代の再建にあたって、以下のように建築の構造を大きく変えていたこともあきらかになったのです。

奈良時代の創建廻廊は東西南北四面とも複廊で、桁行約3.6m(12尺等間)、梁行約3.0m(10尺等間)と推定されます。礎石はすべて抜き取られていましたが、北面廻廊の棟通りには、仕切り壁の下に敷いたと考えられる磚が並んで出土しました(敷磚列)。この磚は、東面廻廊の礎石の抜取穴等からもみつかっており、本来は他の廻廊にも敷かれていたようです。

いっぽう、鎌倉時代再建廻廊は南面が複廊のままですが、その他の北、東、西面はすべて単廊に改造されます。複廊である南面は桁行約3.1m(10.5尺等間)、梁行約3.0m(10尺等間)で創建廻廊と同規模ですが、その他の単廊部分では、桁行約3.1m(10.5尺等間)、梁行約4.8m(15.5尺)と推定されます。廻廊の北西隅部分では礎石が3石遺存しており、規模確定の決め手となりました。

鎌倉時代再建にあたっての単廊への改造は単に建物だけにはとどまりません。奈良時代創建基壇を北面と東面では内庭部側を、西面では内庭部と外周部の両側を大きく削り、基壇自体の幅を狭くしていました。鎌倉時代再建期には、東塔本体の構造を大きく改変していたことがあきらかになっていますが、それは廻廊にもおよんでいたのです。

11月11日には現地説明会を開催し、1,148名の方々に参加いただきました。

今後、引き続き東塔院の門についての調査を実施する予定です。来年度以降の調査にもぜひご注目ください。
(都城発掘調査部 芝 康次郎)



東塔院北西隅の廻廊礎石と雨落溝(北西から)



東塔院北東隅の廻廊基壇(南西から)